

## ケンバの大晦日②

## 初めての温泉を満喫

ケンバにとって温泉は初めてだった。お湯の入り方について一応説明はしたが、女湯に入って世話をするわけにもいかない。

ケンバのことも心配だが、湯煙で視界の悪い浴場に、相撲取りのように大きな黒人のケンバがのっそり入って行けば、老婆など心臓まひを起さかねない。

幸い、客の中に中学生くらいの女の子がいたので面倒みてあげてと頼んだ。

大晦日の温泉は格別だった。浴槽の中で男たちと話し込んでケンバのことは忘れていた。あわてて出ると、ロビーではケンバと女の子が牛乳を飲みながらマッサージ機の上で楽しそうに遊んでいた。雪の壁が道の両側に屹立する峠を越え、吹雪の中をいつもの何倍もの時間をかけて我が家に着いたが、玄関の鍵が見つからない。錠

のかかっている窓があるだろうと周囲を調べたがどこにもない。

2階の窓なら開いているだろうと、猛吹雪の中に脚立を立て、もう一つの脚立を担いで上った。下では、ひざまで雪に埋もれたケンバが寒さに震えながら脚立を支えていた。

二つの脚立をつないでやっと窓へたどり着いたが、2階の窓も駄目だった。クリスマスならサンタの気分にもなれたろうが、大晦日の夕暮れでは泥棒の気分に近い。泣きそうなケンバの顔に「とんでもない所へ来てしまった」と書いてある。

心配することはない。村人がなんとかしてくれるだろう。美郷に来て3年、何度も助けてもらった。パニックになっているケンバには気の毒だが、その状況を楽しんでいた。

(つづく)



橋本白道

佐賀県生まれ。京都で陶芸と出会い、備

前で修業後、故郷に窯を開いた。スウェーデンやリトアニア、ドミニカ共和国に滞在し、ドキュメンタリー映画や陶芸学校づくり挑戦した。2007年、美郷町上野の空き家に、リトアニア出身の陶芸家ベアトリチエさんと夫婦で移住し陶芸工房を開いた。